

本 会 報

学会だより

◇ 常任幹事会議事録

開催日時：平成 19 年 9 月 1 日 14:00 より

開催場所：京都大学農学研究科

出席者：谷坂隆俊会長，長戸康郎副会長，長谷川博，大澤良，佐藤裕，加藤鎌司，佐々英徳，小松田隆夫，阿部利徳，寺地徹，北野英己，奥本裕，熊丸敏博。オブザーバー河合真須美（中西印刷学会担当）

各常任幹事からの経過報告後，以下の点を取り決めた。学会運営を安定させるため，学会年会費を一般会員 10000 円（2000 円値上げ），学生会員 6500 円（500 円値上げ）とする案を幹事会ならびに臨時総会に諮る。要旨集は 3000 円（500 円値上げ）に改定する。会費未納の講演予定者からの会費徴収が滞るため，今後は講演申込時に会員番号と会員氏名の入力を求める。会費未納の学生会員への督促状を郵送は中止し指導教員へ学生会員の会費納入状況を連絡するように改める。作物学会との 2009 年春の合同学会開催については，今後も検討を進める。名誉会員に関する内規改訂案について文言を検討し幹事会に諮り臨時総会で報告する。

◇ 幹事会議事録

日時：2007 年 9 月 21 日 14 時より 17 時

場所：山形大学農学部会議室

出席者：谷坂隆俊，長戸康郎，石本政男，佐藤裕，佐野芳郎，三上哲夫，原田竹雄，阿部利徳，西尾剛，星野次汪，江面浩，大川安信，大澤良，岩田洋佳，佐々木卓治，矢野昌裕，房相佑，間野吉郎，阿部知子，木庭卓人，平田豊，丸橋亘，野村和成，北野英己，掛田克行，長谷川博，山田利昭，加藤鎌司，辻本壽，佐藤和広，村田達郎，藪谷勤，中園幹生，寺地徹，勝田真澄，小松田隆夫，佐藤光，熊丸敏博，佐々英徳，奥本裕 計 40 名

委任状：森宏一，片山義博，野々村賢一，古田喜彦，小島昭夫，山岸博，石井尊生，吉村淳 計 8 名 総計 48 名

1. 各常任幹事経過報告

A) 総務

1) 幹事選挙では地域別定員数を各地域の会員数の比率に幹事数（40 名）を乗じて定めている。今回の選挙では関東 1 地域は会員数の比率に対する幹事定員は 6.8 名となる。これを切り上げて 7 名とすると幹事数が 41 名となり 40 名を超えるので，関東 1 地域のみ少数点以下を切り捨てて 6 名とした。2) 本年 3 月に九州・沖縄地区の選出幹事山川理氏（元九州・沖縄農業研究センター）が定年により関東地区に移動された。これにより九州・沖縄地区選出幹事に 1 名欠員が生じたが，前回選挙では九州・

沖縄地区の次点に該当する方がおられない。幹事の任期が残り半年であること，および幹事選挙の直前であることを考慮して欠員のままにすることにした。3) 卒業・修了などで次期の学会費を納入されない学生会員に対して一律に督促状を郵送することを中止して，指導教員へ郵便とメールを通じて学生会員の会費納入状況について連絡することとした。ただし，入金を忘れる人も多いことを考慮して，11 月の納入依頼郵便に併せて WEB メールを送付し，さらに春の学会申し込み時期にも会費納入を促すメール，もしくは退会届をだすように依頼するメールを発信することとした。

B) 科研費・農学会関係

平成 19 年度科研費研究成果公開促進費「学術定期刊行物」は 250 万円の交付を受けた。今年度より，交付要件として一般競争入札による印刷業者の選定制度が導入されたが，昨年度は中西印刷との契約変更申し出期日を過ぎていた旨の理由書を提出することで入札の導入を回避できたことが報告された。また，同科研費「研究成果公开发表（B）」（件名）公開シンポジウム「民間育種の再評価とこれからの民間育種を考える－民間育種の原点を山形に見る－」は不採択であったこと，日本農学会 80 周年記念事業として「日本農学会 80 年史」の編集出版が計画され，日本育種学会の歴史等についての執筆依頼があったことが報告された。

C) 渉外

作物学会との合同学会開催のためのワーキンググループ（平田氏，北野氏，堤氏，大澤氏）として，作物学会側と話し合いを進めており，同じ場所で同じ時期に開催する方向を目指していることが報告された。

D) アジア作物会議

11 月にバンコクで開催される Bio-asia 2007（11 月 5 日－10 日）において作物学会との共同シンポジウムが企画されたことが報告された。また，この機会に国際作物会議事務局とのビジネスミーティングが行われる予定であることが紹介された。

E) HP 担当

さまざまな会合の呼びかけなどにも学会ホームページが積極的に利用されていることが報告された。

F) 地域幹事

北海道：例年通り研究会，シンポジウムを企画。東北地区：昨年より東北育種研究集会として再発足。関東地区：研究会の企画は進んでいないが，スポーツ大会は開催予定。中部・北陸地区：2 地区で独立に例会を開催。近畿：例会とシンポジウムを開催。中国・四国地区：四国談話会は作物と合同開催してきたが，今後は別個開催に変更。九州・沖縄地区：12 月に第 2 回研究会開催，また今後は作物学会の九州支部との共同開催を計画中。

G) GMO

GMOに関連する学会として世間で間違っただけで流布しているGMO情報を正していく必要があること、この点に関して学会間で温度差があるので担当者連絡会を設置して連携を深めていくことが報告された。

H) 会計

会計の中間報告があり、本年度より科研費は学会会計より独立させることを求められたため、補助金収入は0円になっていること、また57巻2号は科研費から支出されていることが説明された。

I) 編集 (英文誌)

資料に基づいて現在の投稿状況ならびに編集状況が報告された。また、0.8前後で推移していたインパクトファクターが現在0.6前後になっていること、掲載論文の海外からのダウンロード数は増えていることが併せて報告された。オンライン化で掲載までの期間を短縮などのメリットが出てくる点を考慮して雑誌の質をあげるために積極的な投稿をするよう依頼があった。

オンライン化の進捗状況

JSTAGEでのシステム構築作業が遅れているため本大会でのデモ予定はキャンセルされたこと、12月17日ごろに育種学会用に修正された試行版が完成し、試行版に問題がなければ3月24日に運用開始する予定であることが報告された。4月からの本格運用が可能になるよう、試行版完成後～翌2月までの間に試行版の使用上の問題点を確認する作業への積極的な協力依頼があった。

J) 編集 (和文誌)

資料に基づいて現在の投稿状況ならびに編集状況が報告された後、投稿数が少ない点に関して意見交換を行った。和文誌は育種に携わっている人の情報交換の場という側面を強く出していくこと、編集委員会を英文誌と和文誌の合同に変えたことが採択率を下げた大きな原因と考えられること、などの意見が出された。育種学研究的編集体制については、次回の幹事会でも話し合っていくこととした。

K) 集会

前大会(茨城大学、春季大会)は一般講演300題(口頭211題、ポスター89題)、大会参加者646名、懇親会参加者277名であったことが報告された。また、今大会から導入されたUMINシステムでアップされた要旨図表については小さくて見づらいものが全体の1割程度であったこと、図表の修正に関して中西印刷で個別に対応すると要旨集の印刷コストが膨らむので基本的には投稿者に注意していただく必要があることが報告された。

L) 記者レク担当

9月18日にマスコミ9社に対して4件の学会発表課題の記者レクを行ったこと、現時点でイネ低温発芽性と閉花授粉イネの課題が記事になったことが報告された。

2. 議事

(1) 平成19年度日本育種学会賞選考について

学会賞選考委員会(長戸康郎委員長、北野英己、矢野昌裕、阿部利徳、佐野芳郎、三上哲夫、西尾剛)および幹事会の議を経て次の2件を選定した。(補足:推薦時の原田氏の受賞課題名、ならびに育種グループの受賞課題名、受賞グループ名に関しては、選考委員会からの要望により関係者と調整を行い以下のように改められた)

◎原田久也(独立行政法人農業生物資源研究所):ダイズにおけるゲノム解析基盤の構築とその育種の利用

◎愛知県農業総合試験場・北海道農業研究センターイネ病害抵抗性育種グループ(代表者:藤井潔):イネ縞葉枯病・穂いもち抵抗性に関するDNAマーカー選抜育種の体系化

(2) 平成19年度日本育種学会奨励賞選考について

学会賞選考委員会および幹事会の議を経て次の2件を選定した。

◎山田哲也(東京農工大):プログラム細胞死による雑種致死と花卉老化の誘導機構に関する生理遺伝学的ならびに細胞生物学的研究

◎小森俊之(日本たばこ産業(株)):分子遺伝学的手法を用いたハイブリッドイネ実用化に関する研究

(3) 会費値上げ提案について

事業経費が漸増しているのに対して、主に団体会員、賛助会員の減少傾向が続いているため運営基金の取り崩しが必要となっている現状、ならびに科研費研究成果公開促進費の採択状況が毎年大きく変化し採択されない場合や大幅な減額の可能性が大きいことが紹介された。さらに、今後の大幅な収入増が期待できないこと、事務経費削減が限界に来ていることに現状を改善するためには学会費の値上げが必要不可欠であることが説明された。学会費の値上げ幅については、普通会员2000円(現行8千円を1万円)、ならびに学生会員500円(現行6千円を6千5百円)とし、これと関連して大会要旨代を500円(現行2千5百円を3千円)値上げすることが提案された。これらの値上げによって約375万円の増収になると試算されること、この増収は科研費の採択状況によらず学会誌の発行を維持できる最低額であり新規事業の着手に必要な財源確保には至らないことが説明された。審議を経て、学会費の値上げ、ならびに値上げ幅について承認され、臨時総会で諮ることとした。

(4) 会費に関わる会則改訂について

会費に関わる会則改訂が以下の通り承認され、臨時総会で諮ることとした。

現会則の5条:本会の会員は普通会员、団体会員、学生会員、名誉会員および賛助会員の5種とする。名誉会員は本会の発展と育種および育種学に功労のあった者で、総会の決議により決められる。賛助会員は本会

の趣旨に賛同し援助協力する個人、団体または機関とする。会費は普通会員年 8,000 円、団体会員 16,000 円、学生会員 6,000 円、賛助会員一口につき 20,000 円を前納するものとする。以上 5 種の会員は学会誌の配布を無料で受ける。ただし別冊については団体会員、名誉会員、賛助会員のみ無料配布とする。団体会員および賛助会員を除くすべての会員は講演会および学会誌において業績を発表することができる

新会則の 5 条：本会の会員は普通会員、団体会員、学生会員、名誉会員および賛助会員の 5 種とする。名誉会員は本会の発展と育種および育種学に功労のあった者で、総会の決議により決められる。賛助会員は本会の趣旨に賛同し援助協力する個人、団体または機関とする。会費は普通会員年 10,000 円、団体会員 16,000 円、学生会員 6,500 円、賛助会員一口につき 20,000 円を前納するものとする。以上 5 種の会員は学会誌の配布を無料で受ける。ただし別冊については団体会員、名誉会員、賛助会員のみ無料配布とする。団体会員および賛助会員を除くすべての会員は講演会および学会誌において業績を発表することができる

(5) 平成 20 年度秋季大会（第 114 回講演会・第 50 回シンポジウム）開催地について

同大会を滋賀県立大学で開催することが提案され、承認された。

(6) 名誉会員に関わる内規改訂について

名誉会員に関わる内規改訂案が提案され、審議を経て以下の改訂案が承認された。

現行：名誉会員に関する事項 6) 名誉会員には名誉会員推戴状を贈る。名誉会員は学会費の免除、その他の便宜を受ける。

新：名誉会員に関する事項 6) 名誉会員は育種に関する学術または本会の発展に大きく功労のあった個人とし、会長は、常任幹事会の議を経て、名誉会員候補者を推薦する。なお、推薦にあたっては本人の同意を得る。名誉会員の選出は、本会幹事会の議を経て、総会の決議による。名誉会員には名誉会員推戴状を贈る。名誉会員は学会費の免除、その他の便宜を受ける。

(7) 日本育種学会功労賞の制定について

学会功労者を表彰する新たな表彰規定（H 項）を追加することが提案された。これに対して、学会賞の範疇なら学会賞選考委員会で選考するプロセスが必要となる、「育種学の進歩」と言う文言は育種学会賞と区別がつきにくいという意見が出された。この点については「育種学の進歩」という文言を規定から削除することとした。また、過去には養賢堂には感謝状が贈呈されたこともあり常任幹事が推薦するものならば功労賞ではなく感謝状でいいのではないかと、幹事の歴任は経歴書に記載できる事項であり学会運営に尽力された方への表彰規定は学会運営のボランティアベースを崩す、という意見が出された。この点に関しては、会長より「この場で賞の対象となる

特定の個人名を挙げることはできないが、学会として功労する賞があるといいのではないかと考える」という回答があった。表彰規定には無記名投票の手続きを残すことで表彰規定の制定は承認された。しかし、提案された表彰規定には多くの文言訂正が必要であったため、次の幹事会で改めて内規の改定案を審議することとした。次の幹事会で表彰規定が承認された場合には適用される方を常任幹事会より提案し、表彰者が承認された場合は総会で紹介し功労賞の賞状は総会后に作成して、受賞者に贈ることとした。

3. 関連報告

(1) 男女共同参画についての活動状況(勝田) 育種学会への要望内容が報告され、本大会中に企画されているランチョンセミナーには男性の参加も呼びかけていることが紹介された。

(2) シンポジウム委員会(三上) 本大会では 5 課題でシンポジウムが開催されることが紹介された。また、シンポジウム課題の公募記事を掲載できなかったので 11 月の会費納入依頼書にシンポジウム課題の公募文を同封して発送されることが報告された。

(3) 滋賀県立大学で開催されるシンポジウムは 50 回記念シンポジウムとなるので、学会としてシンポジウムを企画する予定であることが確認された。

(4) JABEE 関係 詳細はホームページに掲載することが報告された。

(5) 次期開催校 明治大学丸橋氏より、開催日程は 3 月 27 日(幹事会)、28～29 日(大会)であり、場所は生田キャンパスであることが紹介された。

(6) 会計幹事より、図書経費削減により団体会員の数が増加している点が指摘された。この点に関して幹事各位に「もし購入打ち切りの話があれば、継続への働きかけに協力いただきたい」との依頼がされた。

最後に阿部大会運営委員長より挨拶をいただいて閉会した。

◇ 臨時総会

日時：2007 年 9 月 22 日 17:30～18:00

場所：東京第一ホテル鶴岡 鳳凰の間

議事進行に先立ち、谷坂会長が議長に推薦され承認された。

◎議題

1. 学会費改定について

学会の会計状況について大澤幹事長ならびに長谷川会計担当幹事より説明があった後、学会運営を安定化させるために学会年会費を一般会員 10000 円(2000 円値上げ)、学生会員 6500 円(500 円値上げ)とする案が紹介された。質疑のあと、学会費改定が原案どおり承認された。

2. 会則改訂について

学会費の改定に伴う会則改訂について大澤幹事長より説明があり、下記案どおり承認された。

会則改訂案

現行 第5条 本会の会員は普通会員、団体会員、学生会員、名誉会員および賛助会員の5種とする。名誉会員は本会の発展と育種および育種学に功労のあった者で、総会の決議により決められる。賛助会員は本会の趣旨に賛同し援助協力する個人、団体または機関とする。会費は普通会員年8,000円、団体会員16,000円、学生会員6,000円、賛助会員一口につき20,000円を前納するものとする。以上5種の会員は学会誌の配布を無料で受ける。ただし別冊については団体会員、名誉会員、賛助会員のみ無料配布とする。団体会員および賛助会員を除くすべての会員は講演会および学会誌において業績を発表することができる。

新会則 第5条 本会の会員は普通会員、団体会員、学生会員、名誉会員および賛助会員の5種とする。名誉会員は本会の発展と育種および育種学に功労のあった者で、総会の決議により決められる。賛助会員は本会の趣旨に賛同し援助協力する個人、団体または機関とする。会費は普通会員年10,000円、団体会員16,000円、学生会員6,500円、賛助会員一口につき20,000円を前納するものとする。以上5種の会員は学会誌の配布を無料で受ける。ただし別冊については団体会員、名誉会員、賛助会員のみ無料配布とする。団体会員および賛助会員を除くすべての会員は講演会および学会誌において業績を発表することができる。

◎報告事項（大澤幹事長）

1. 名誉会員規定に関わる内規改訂について

名誉会員に関する事項 6)の改訂について大澤幹事長より報告がなされた。

◇ 日本育種学会第112回講演会 選定課題記者会見報告

会見日時：平成19年9月18日（火曜）15:00～16:30
会見場所：学士会分館（東京都文京区本郷7-3-1（東京大学構内赤門隣））

出席者：幹事長 大澤良、庶務幹事 中園幹生

参加報道機関：日本経済新聞、読売新聞、毎日新聞、時事通信社、共同通信社（2名）、日本農業新聞、日刊工業新聞、化学工業日報、科学新聞社の計9社（10名）

平成19年9月22日（土曜）、23日（日曜）に山形大学（鶴岡市）で開催された日本育種学会第112回講演会の講演課題（計275課題）の中から常任幹事によって選定された以下の4課題について、記者会見を実施した。

【記者会見課題】

(1) 講演番号105, 106, 107「イネの低温発芽性遺伝子の分子機構の解明」藤野賢治¹・関口博史¹・松田康

之¹・小野和子²・矢野昌裕²（1.ホクレン, 2.生物研）

(2) 講演番号315「花の色模様の客観的定量化と人による主観的認識との関係」岩田洋佳¹・吉岡洋輔²・長谷暢一³・松浦誠司³・大森宏⁴（1.中央農研, 2.野茶研, 3.（株）トーホク, 4.東大大学院農学生命科学）

(3) 講演番号517, 518「日本イネ品種の遺伝解析に有用なmPingSCARマーカーの作出」門田有希¹・内藤健²・斉藤大樹¹・大木信彦¹・出田収³・中崎鉄也¹・築山拓司¹・奥本裕¹・谷坂隆俊¹（1.京大農, 2. University of Georgia, Dep. Plant Biology, 3. 近畿中国四国農業研究センター）

(4) 講演番号625「イネ閉花受粉性突然変異体の分子機構の解析」吉田均¹・伊藤純一²・大森伸之介¹・三好一丸²・堀米綾子²・内田英史¹・木水真由美¹・松村葉子¹・草場信²・佐藤光³・長戸康郎²（1.中央農研・北陸, 2.東大, 3.九大）

それぞれの課題について発表者に説明用レジュメを作成していただき、それに基づいて大澤と中園が説明し、質疑応答を行った。記者会見後、講演番号105, 106, 107の記事が、日本経済新聞（9/19夕刊）、北海道新聞（9/20夕刊）、日本農業新聞道内版（9/20）に掲載された。また、講演番号315の記事が、読売新聞（9/22夕刊）、日経産業新聞（9/25）に掲載された。さらに、講演番号625の記事が、日経産業新聞（9/20）、日本農業新聞（9/20）、日刊工業新聞（9/20）、化学工業新聞（9/25）、フジサンケイビジネス（オンライン版；9/25）、サイエンスポータル編集ニュース（オンライン版；9/25）に掲載された。

◇ 男女共同参画推進委員会からの報告

ランチョンセミナー「育種学会における男女共同参画を目指してVol.1－女性研究者をとりまく環境－」開催報告

開催日時：2007年9月23日12:30～13:30

開催場所：山形大学農学部

表記内容に関する本学会における第1回のセミナーを本学会の男女共同参画推進委員会が中心となって秋季大会期間中の昼食時に開催した。委員以外の参加者は、59名（男性40名、女性19名）であった。

はじめに、同委員会委員長である吉田薫氏より、我が国において女性研究者が少ない現状、その社会的背景と女性研究者の現状に関する調査結果、第3期科学技術基本計画において女性研究者の活躍の促進が定められていること、現在行われている科学技術振興調整費による支援をはじめとする取り組みの概略等について、紹介がなされた。また、学会活動に関わる事項として、男女共同参画学協会連絡会をはじめとする学協会の取り組みの紹介、ならびに、日本育種学会における現状の説明と学会に対する委員会からの要望が同氏よりなされた。さらに、同委員会委員より、学会全体として望ましい道筋を見つけ出していくことがこの委員会の第一の役割であり、そ

のために問題点を明らかにする必要があるため、意見を出してほしいとの意向が伝えられるとともに、女性研究者支援に関する大学等に対する予算措置の背景には学会組織からの積極的な発信が効果をもったと考えられることなど、学会における活動の意義について言及がなされた。

学会における実際的な活動に関することとして、委員長より、大会会場の近隣の託児施設を紹介していく予定であることが伝えられた。また、過去に女性会員が学会の役員等として学会活動に参加することを辞退する例がしばしばあったが、こうした活動は研究者間の交流の場となりうるものであり、長期的な視点に立って積極的に引き受けてほしいとの呼びかけがなされた。

会場からの意見として、任期つき雇用等による生活の不安定さを解消できるように学会としての提言を望むという意見、ならびに、学会によってこの問題に関する取り組みの程度に差があるようだが本学会として今後どのような取り組みを考えているのかとの指摘があった。後者に関して、今回のようなセミナーはもとより、ホームページ等を通じて、本学会が参加している学協会連絡会を通して得られる他学会や大学等の研究機関での取り組みを紹介するなど、情報の提供を充実させていくという方針が伝えられた。本委員会としては、この問題は、現在、研究者である方々の問題であると同時に、これから研究者を志望する世代の人にとっての問題でもあることから、現在の状況、その背景となっていることから、さらにこのことに対して社会でどのような取り組みがなされているのか、ということに関して、学会内外に対して認知度を上げるようにしていくことが重要であると考えている。この他、会場から、大会開催時の託児施設に関して、過去の大会で行った事例の紹介や、大学に託児所がある場合にその利用を検討してはどうかという意見等があった。また、本学会としてこうした活動を円滑に進めていくためには財政基盤が不可欠であり、それを検討していく段階にあるとの意見があった。現状では、学協会連絡会の活動への参加に関わる費用、ならびにシンポジウムの開催の費用が予算化されている。今後の学会としての取り組みによっては、これらのこと以外に対する予算措置が必要になるものと考えられる。

セミナーの最後に、谷坂隆俊会長から、我が国においては、これからは社会構造と同じく研究者集団を構成する人々の年齢層が上がっていく状況にあり、この問題に関して幅広い年齢層にわたる理解が重要になるということ、また、学会として本委員会の活動に全面的に協力していく方針であるということが述べられた。

セミナー会場においてアンケート用紙が配布され、多くの方々から回答をいただいた。いただいたご意見を今後の本委員会の活動に大いに反映させていきたいと考えている。次回のセミナーは、2008年春季大会期間中に開催することを予定しており、それ以降は、年1回、春季

大会において開催していく予定である。(文責：金澤章)
※アンケート結果は学会ホームページに掲載されていません。

研究助成公募の案内

◇ 財団法人タカノ農芸化学研究助成財団 平成20年度研究助成対象者募集要領

本財団は、農学、特に農芸化学(生物資源等)に関する学術研究を助成し、もって学術研究の発展に寄与することを目的とし設立されました。本年度も、農芸化学等に関する研究を行っている大学等の研究機関の研究者に対し、研究助成金を交付いたします。特に、若手研究者への助成の枠を設け、今後の当該分野の研究促進に役立ちたいと考えています。平成20年度は、次の要領で助成対象者を募集いたします。

1. 研究課題：(1) 穀類並びに豆類の栽培・育種に関する研究 (2) 穀類並びに豆類の品質・成分並びに栄養生理等に関する研究 (3) 穀類並びに豆類の利用及び加工技術に関する研究 (4) 納豆菌等微生物の特性・生成酵素等に関する研究
2. 研究助成対象者：(1) 大学及び短大の研究者(大学院生も含む) (2) 国立試験研究機関の研究者 (3) 公立試験研究機関の研究者 (4) その他本財団が適当と認めた研究者
3. 助成金額：一般研究者1件100万円を3件程度、若手研究者1件50万円を2件程度(昭和43年4月1日以降に生まれた者)
4. 交付時期：平成20年5月予定
5. 申請手続き方法：当財団所定の申請用紙に必要事項を記入し、平成20年3月20日(必着)までに郵送願います。
尚、申請書用紙は、タカノフーズ(株)ホームページ <http://www.takanofoods.co.jp/> 内【タカノ財団について】からダウンロードできます。または、E-mailにお問合せいただけましたら、書類を添付して返信いたします。
6. 申請書請求先及び送付先 〒311-3411 茨城県小美玉市野田1542
TEL：0299-58-4363 FAX：0299-58-3847 (財)タカノ農芸化学研究助成財団
E-mail：tazaidan@takanofoods.co.jp
7. その他：同一研究課題で、他の団体等へ応募され、かつ、本年度重複助成となられた場合には、助成をできない場合がありますのでご注意下さい。

各賞推薦の案内

◇ 第49回藤原賞受賞推薦募集

財団法人藤原科学財団は、日本の製紙王といわれた故藤原銀次郎翁が寄付された私財を基金として、1959年

(昭和34年)に創設されたものであります。わが国に国籍を有し、科学技術の発展に卓越した貢献をされた方に、1960年(昭和35年)以来、藤原賞(賞状、賞牌および副賞)を贈呈してまいりました。賞は毎年2件とし、副賞として各1千万円を贈呈しております。今回は第49回藤原賞受賞候補者を募集いたします。

1. 推薦の対象は、自然科学分野に属するものとします。
2. 受賞候補者は、日本に国籍があり、且つ日本在住の方であれば、ほかに賞を受けられた方でも、また以前に推薦された方でも結構です。
3. 受賞候補者には必ず所属組織、研究機関の長の推薦が必要です。
4. 受賞候補者は原則として受賞対象題目1件につき1人とします。
5. 同封の推薦要項書(No.1, No.2の2枚、コピーでも可)に、必要事項を記入してお送り下さい。なお参考資料として、受賞候補者の受賞対象題目と関係する主要論文テーマ(10篇以内)のリストおよび主要論文3篇以内の別刷(コピーでも可)を各1部ずつ、同封してお送り下さい。この資料はご返却いたしませんのでご了承ください。
6. 選考は、5つの分科(1数学・物理, 2化学, 3工学, 4生物・農学, 5医学)に分けて行いますので、推薦要項書P1上段の希望分科欄に推薦者が考えた希望の分科を○印で囲んでください。但し、決定は選考委員会が行います。
7. 受賞者の決定は2008年5月中旬とし、贈呈式は2008年6月17日(火)に行います。
贈呈式は受賞者本人の出席を前提とします。
8. 推薦要項書用紙を別にご入用のときは、当財団へご請求下さい。早速お送りいたします。
9. 推薦要項書提出締切日 2008年1月31日(木曜日)
10. 推薦要項書送り先 〒104-0061 東京都中央区銀座3丁目7番12号(王子不動産銀座ビル) 財団法人 藤原科学財団 TEL 03-3561-7736 FAX 03-3561-7860
11. 藤原科学財団ホームページ <http://www.fujiwara.or.jp> に募集要項が掲載されています。

地域談話会活動

◇ 四国談話会

2006年11月30日に四国談話会公開シンポジウムを日本作物学会四国支部と共同開催し、翌12月1日に第71回講演会を愛媛大学農学部で開催した。

公開シンポジウム「四国地域における作物資源とその利用」

近藤日出男 四国の在来作物 とくに赤カブについて／原田光(愛媛大学農学部) 四国の在来トウモロコシの起源について／水口聡(愛媛県農業試験場) 愛媛県産雑穀の食品機能性について

一般講演

- ①浅海英記¹・真木裕司²(1.愛媛県農試, 2.愛媛県農業大学校) ツクネイモ栽培における生分解性マルチの利用について ②大西香名・大橋広明(愛媛大農) 山野草類の組織培養による増殖可能性の検討Ⅰ. アポイカラマツ・セツブンソウ ③玉乃井晴香・大橋広明(愛媛大農) 山野草類の組織培養による増殖可能性の検討Ⅱ. タツタソウ ④山田美香・堀本真弓・山口聡(愛媛大農) チャとランのダイレクトシューティング培養増殖試験 ⑤Chang Caitao・柿原文香・加藤正弘(愛媛大農) Comparative alloplasmic effects of Brassica napus and B. juncea on seed characteristics of B. carinata ⑥徳原彩香・上甲まどか・柿原文香・加藤正弘(愛媛大農) Pelargonium 属植物における節間および種間雑種の作出 ⑦岡本充智¹・栗坂信之¹・柳澤貴司²(1.愛媛県農試, 2.近畿中国農研セ) PCRによる麦茶からのDNAの検出 ⑧浅海英記(愛媛県農試) サトイモにおけるガンマー線照射による線量反応

日本育種学会会員異動(2007.7.21 ~ 2007.10.20)

◇ 普通会員入会：松田康之(北海道), 中村保典(秋田), 長村吉晃, NGUYET, T.M. NGUYEN, Hamwiah Aladdin(茨城), 内藤嘉磯, 深山真史, 森宮乾(東京), 太田沙由理(新潟), 表野元保(富山), 佐塚隆志(愛知), 安部匡(沖縄)

◇ 学生会員入会：田中匠, 丸岡正道(北海道), 伊藤進, 佐藤陽洋(宮城), 皆川晋(茨城), 浅野頼子, 鈴木智子, 宮本正薫(東京), 相澤義春, 南里智洋(神奈川), 長岡朝彦, 長澤章道(新潟), 佐々木卓, 中野道治(静岡), 柴田洋佑, 鈴木幹奈(愛知), 亀田絵美(滋賀), KOSONH XAYPHAKATSA, RIZAL GOVINDA, 広田直子(京都), 古地玲規(大阪), 中村直, 山口万里子(兵庫), 久保絵里香(岡山), 今井奈保子(佐賀)

◇ 団体会員：石川県立大学(石川), 太白キャンパス図書館(宮城)

◇ 外国会員：MJS International, 慶植(大韓民国)

住所変更等

◇ 普通会員：紙谷元一(北海道), 五十鈴川寛司(山形), 川田元滋, 坪倉康隆(茨城), 田中篤(栃木), 吉岡洋輔(三重), 森正彦(京都), 福永健二(広島)

◇ 学生会員：武藤千秋(京都)

◇ 外国会員：Korea Institute of Science and Technology Information(大韓民国), 余小林(中華人民共和国), Shinji Kikuchi(U. S. A.)

逝去

笹原健夫(宮城, 普通会員)

慎んでご冥福をお祈りいたします。